No.66
2016. 3. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■地球の木講座「ネパールから見た日本、日本から見たネパール」 1
■ネパール訪問報告　村の復興は村人の手で …… 2,3
■支援地から　ラオス …… 4
■支援地から　カンボジア …… 5
■桜美林大学での講義「ほしい未来は自分で創る」 …… 5
■気仙沼だより その12 …… 6,7
■地球の木で活動する「私の場合」 …… 6
■『日本と原発』上映会に参加して …… 7
■活動日誌（12～2月抜粋） …… 7
■第17回地球の木総会のお知らせ …… 8
■INFORMATION …… 8

地球の木講座

「ネパールから見た日本、日本から見たネパール」

ジギャンさんを招いて（1/30@かながわ労働プラザ）

ネパール人に「ネパールってどんな国？」と聞くと、住んでいる地域によって百人百様の答が返ってくるというほど、ネパールは民族も言葉も文化も多様性に富んでおもしろい国。多くの民族が、象徴である国王の下に一つにまとまっていたが、2008年の王政廃止でタガが外れ、地域のニーズや不満が噴き出している。

今、ネパール人を苦しめているガソリンや灯油不足もここに端を発する。昨年制定された新憲法の選挙区分を巡って、インドとの国境地帯に暮らすインド系住民が強く反発しており、インドもこの声を無視できない。ネパール政府が異なった意見に耳を傾ける姿勢をもう少し早く見せていれば、ここまで対立が深まることは避けられたであろう、と憂慮するのは、ジギャン・クマル・タパさん。在日15年、ネパール政府公式通訳、ラジオ・テレビのコメンテーター、国際理解の講師など多方面で活動する若きネパール人だ。

◀ネパールの潜在力は民族の多様性にあり

▼ネパール大地震での支援活動を語るジギャンさん

ネパールと日本の懸け橋として活躍するジギャンさんだが、初めて羽田空港に降り立った時、日本について学んだことが皆ウソだったと気付いてびっくりしたという。教科書に「日本人は着物を着ている」とあったが、着物を着ている人など一人もいない。開発のモデルのはずが、英語で話しかけても、皆逃げていってしまう。どこでも気軽に話しかけるネパール人と違って、外国人に対して「防衛本能」を持っている日本人とどうコミュニケーションを取ったものか……心折れる思いもしたらしい。

そんなジギャンさんも日本語に磨きをかけ、今では、四文字熟語を駆使して聴衆を魅了する。日本に住んでいると、ネパールにいた時には気付きもしなかった母国の良さ、改善すべき点が解るらしい。まず、ヒマラヤの美しさ。これは、日本に来て初めて気付いたと言う。ネパールは豊かな自然に恵まれているが、産業が育たない。原因は、一日10時間停電という電力不足と、内陸国であるため空輸しなければならないという地理的な要因だ。環境を壊してもお金を稼がなくてはならない。

ネパール国内で仕事がないため、1日に1,200人がマレーシア・カタール・日本などに出稼ぎに行く。中には留学する人もいるが、最終目的は国外への移住で、人口流出は国家的な問題となっている。悲しいことに、1日に6～7人が無言の帰国をする。50度もある灼熱の地で働いて過労死する人、結核で命を落とす人、大学を目指して語学留学するが、大学への道は遠く、せいぜい専門学校止まり。思い描いた夢のようにはいかない。

この出稼ぎの波を止めることはできないが、良い点もある、とジギャンさん。海外でいろいろ見聞きしてきた人たちが、ネパールの良さに気付いて、アイディアを出し合うことだ。

電気がなくても、ハーブ作りの村に観光客を誘致することはできる。留学経験を活かして、ネパールと日本を繋げることができる。カトマンズの排気ガスさえなくせば観光客は来てくれる、と目を輝かせて未来を語るジギャンさんに、地震で多くを失ったネパールの復興に一筋の希望の光を見た気がした。

（ネパールチーム　乳井京子）

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 会報作成チーム ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

村の復興は村人の手で

仮設シェルターと技術研修

ネパール大地震被災者支援の進捗状況の視察のため、12月2日から8日まで、ネパールカブレ郡マンガルタール村を訪問しました。支援に際しましては、350人以上の個人や団体の方々にご寄付を頂きました。心から感謝いたします。

ガソリン不足で渋滞?

ネパールでは大地震の影響に加え、インドから燃料や医薬品が入ってこないという深刻な状況を迎えています。前号でもお伝えしましたが、9月20日に新しい憲法が発布されて以来、その内容に不満を抱くインド系住民の反発が強く、1月の時点で、これらの物資の流通が制限されています。

この影響で、カトマンズ市内はいつもより車やバスの数も少なく、走っていたとしても、屋根の上にたくさんの人を乗せています。市民は歩いたり、車体に「No Petrol/No Diesel/No Gas/No Problem (灯油なし、ディーゼルなし、ガソリンなし、問題なし)」と書いてある、電気で走る小型乗り合い自動車、サファ・テンポを利用しています。「クリーンな乗り合い自動車」という意味だそうです。ガソリンスタンドがある道は、給油を待つ車が列をなしています。私たちがお願いした車の運転手曰く「食べ物や飲み物を車の中に持ち込んで3日間待って、ようやくガソリンが買えた」。しかし、ガソリンは闇で買えばいくらでも手に入り、普段は1リットル104ルピーのところ、500ルピーもするのだそうです。

ガソリン待ちのバス

プロパンガスも手に入りにくいので、調理にIHのコンロを使ったり、村でガスを使っていた家や食堂は薪のかまどに逆戻り。おもしろいことに、薪で炊いたご飯は最高という談義もあちこちで展開。プロパンガスも4～8倍の値段で取り引きされています。1日12時間の停電があるので、ガスと電気を時間に応じて上手に使う工夫も必要です。

村からの帰り道、市内で道路が予想に反して混んでいたのは、ガソリンを待つ車で道幅が狭くなっていたことと、高いガソリンを買って車に乗る人が増えたためでしょうか。一部の人が大金を儲けていることがうかがえると同時に、医薬品不足の病院や交通手段のない貧困層の病人や妊産婦のことがとても気になる状況でした。

仮設シェルター

燃料不足に喘ぐカトマンズを離れ、マンガルタール村へ。村には小水力発電や牛糞を利用したバイオガスがあるので、比較的落ち着いた様子でした。7月に訪問した時に、SAGUNと地球の木は、仮設シェルターの建設補助を計画しました。それから実施までの過程はとても丁寧なものでした。まず、コーディネーターのカマル・フヤルさんが、シェルター支援の概要を示した文書を作成し、SAGUNのメンバーにコメントをもらいます。次に、ピンタリ地区のムクマヤ・タマンさん(女性)とラジャバス地区のニラージ・マガールさん(男性)が地区担当者として選ばれました。その後、SAGUNマンガルタール協力委員会(SMCC)と話し合い、村での活動は意欲的な当委員会が引き受けることになりました。SMCCは、村の中の各政党の代表者からなる委員会と各区の代表者のメンバーと話し合いを持ち、メンバーの承認と協力の約束を得ました。区の代表が、支援が必要な家庭を表にして持ち寄り、その表に従ってムクマヤさんとニラージさんが各家庭を回り、聞き取り調査をしました。最終的にマンガルタール村で100世帯、ポカリナラヤンスタン村で35世帯が決定されました。対象者は妊婦や乳幼児のいる家庭、高齢者、障がい者、片親の家庭など、災害弱者に絞って選ばれました。

その後カブレ郡役場に支援計画を提示し、承認されました。これらすべての工程は、カトマンズと村を行き来して行われましたが、燃料不足の折、何度も会議が延期されたそうです。

さて、私が現地を訪問した時は、ちょうど支援を受けることになった家庭に必要な資材についてのアンケートを取っているところでした。私も3つの地域の7世帯を訪問し、話を聞きました。そのうちのいくつかを紹介します。

チャープ地区のマイナさん

・マイナ・タマンさん

息子1人、娘1人と義母と暮らしています。家は崩れ、現在は自分たちで建てた仮設シェルターに暮らしています。穴が空いているトタンの代わりになる新しいトタンを希望しました。この地域は水のパイプが壊れ、水不足のため、種を蒔いた菜種が枯れ、豆も育っていませんでした。さらに、猿が増えて主食のトウモロコシが奪われる、厳しい状況でした。

チャープ地区のマイヤさん

・マイヤ・ネパリさん
ダリット(被差別カースト)で、土地を持たず、家族7人で小さな仮設小屋に住んでいました。

・モナクマリさん
夫婦と息子5人、娘2人で暮らしています。息子の1人は目が不自由です。以前収入創出プログラムに参加して会ったことのある女性で、あの時の写真をまだ持っていて、会えて嬉しいと喜んでくれました。

どの家庭もシェルターやテントはあるが、これから長期にわたって暮らすためのしっかりしたシェルターが必要であり、選考基準によって選ばれていることを確かめることができました。選ばれた支援が必要な100世帯は地域ごとにグループを作り、今後収入創出などの活動に携わっていく予定です。

大工と石工の技術研修

住宅再建のための技術研修の開講式が12月6日に行われ、参加しました。20人の研修生が泊まり込みで3ヵ月間実地訓練を行います。宿泊施設は村の人が提供、3度の食事の世話は母親グループのクンジャマヤさん他2名が担当します。

技術研修が始まる

参加者はすでに大工の経験がある人もいます。住宅再建の政府の方針が決まり、研修を受けた者のみが新しい基準の住宅建設の仕事ができます。さらに、この研修を終えると、高校修了国家試験と同様の資格が与えられ、さらに上の公務員試験も受けられるとあって、意欲満々の様子がうかがえました。彼らの今後の活躍を期待したいです。

学校事情いろいろ

第3次被災者支援として、ラーニングセンター建設(壊れた学校の校舎を補う)を計画しました。この事業に、かながわ国際交流財団から助成金を得ることができました。今回、建設予定の2つの小学校を訪問しました。

・バナンチェ地区チャトレピパル小学校(幼稚園～小学5年 76人)
教師は校長の他6人。1年生の先生は地球の木がサポートしている男性のユブラージさん。校舎3棟のうち、古い1棟が半壊。その分の校舎としてラーニングセンターを建設することに決定しました。

チャトレピパル小学校で地震の紙しばい

・マンガレソーラ小学校(幼稚園～小学5年 27人)
教師は校長を含めて2人。新しい校舎建設中で、古い校舎も郡の予算が下りて修復中でした。生徒数が少ないので、校舎の不足はなく、必要なのは教師ということが判明しました。

すぐそばに新しい校舎に移転したばかりの小学校があり、お披露目の会が開かれていました。生徒数は30～35人であるのに、正式に雇われたのは教師4人。地域によって格差があることが分かりました。この2つの小学校は地域が近いこともあり、来年度合併されることも考えられるので、支援の対象からは外すことになりました。SMCCの委員と話し合った結果、すべての学校をSMCCで実際に視察した上で2校を決めることになりました。

- -

今回の訪問で感じたことは、地震に加え燃料不足の状況の中、人々は生活の知恵を使い、工夫をしながら生活をしていること。そして、同じ村の中でもカーストや民族の違いなどに由来する力の差があることでした。本当に必要とされている支援は何なのか。必要としているのは誰なのか。それを見極めるためにも、村の様々な人々と時間をかけて話し合い、理解を深めていくことが大切であることを今一度確認できました。　(ネパールチーム　丸谷士都子)

＊やっとシェルターが完成！＊

長い工程を経て計画された仮設シェルターがようやく完成の運びとなりました。主にネパール製の資材を購入し、ほとんどの家が完成しました。

技術トレーニングも現在宿舎の前に、研修生たちで家を建設しているところです。

2つ目の校舎建設予定地はサレニ地区の小学校に決定しました。

from Laos

やっぱりいいなあ、ラオス
～2回目の駐在生活始まる～

地球の木のみなさん、こんにちは。3年半住んだラオスに、3年半の東京事務所勤務を経て帰ってきました、JVCの平野です。車で溢れかえった道路、東京でも滅多に見ないロールスロイスにベントレー、けたたましいクラクション、そこかしこで行われる高層ビルの大工事、50mおきにあるケンタッキーの看板。久しぶりだとこんなに変わったかと目を見張らざるをえません。と、これはビエンチャンではなく、とある会議で訪れたお隣、カンボジアはプノンペンのお話。

そして空路ラオスのビエンチャンへ。ビエンチャンも随分変わったように思いましたが、プノンペンと比べるとやっぱり随分かわいいビエンチャンでした。それでもやはり町は変わっています。食堂でご飯を食べている3人のラオス人の若者。3人とも別々にスマホをいじっています。数年前だと考えられません。サワナケートの街にも、オシャレなカフェなどがどんどんオープンしています。サワナケートの経済発展を見たお隣タイの人々が、メコン川のこちら側にやってきて色々と商売を始めたようです。

村はどうかと言うと、電化される所も増えてきましたし、行政が中心部から離れたところにも市場を作ったりして、日本製の3分の1の値段で買える（牛1頭くらいの値段）中国製のバイクを持つ人も増えました。小さな家に牛が1頭繋いであると暮らし向きが良いように見えないのに、バイクがあると見え方が違うのは不思議なものです。一方で、食料の少なからぬ部分を自然資源に依存している暮らしぶりはあまり大きく変わってはいないようです。川に行けば投網をする男性、丸い網のようなものでエビやカニや水生植物を採取する子どもたちがおり、時に桃源郷というのはこういうところなのだろうか、と勝手なことを思ったりする、そんなラオスの風景は健在です。中心部から離れた村では、日本人（外国人?）は初めて!と目を丸くするお婆さんにも会いました。

獲った魚を見せる女性

山菜などを採る女の子

投網する男性

2回目の赴任ということで、「ラオスが好きなのですね」と言われることもありますが、正直自分では好きとか嫌いとか分かりません。腐れ縁のように思っています。それでも、思わず初心に帰って“ラオスっていいなあ”と心から呟いてしまう、そんな魅力がラオスの村にはあります。村はこれからもっと変わっていくでしょう。これは、基本的にはNGOが変えられることではないですし、村人自身全て昔通りがいいとも思っていないでしょう。政府が一つの方向での「発展」を志向する中、村人が伝統的な暮らしの良い所を意識して残していく、2回目の駐在では、そんなことに少しでも力添えしていきたいと考えています。

（JVCラオス事務所　平野将人）

from Cambodia

春を呼ぶスカーフ

地球の木が数年前から取り扱ってきた薄くて軽いシフォンのようなシルクスカーフの生産者を1月に訪ねました。

プノンペンから国道1号線を東に向かって1時間進み、脇道に入り、途中で小さなフェリーに乗り、さらにデコボコの田舎道を40～50分進むと、ようやくカンダール州とプレイベン州との境にある目指す村に着きました。1月は乾季なので車で村まで来ることができましたが、雨季には、道が水没してしまうため、メコン川を渡ったあたりから、小さなボートに乗り換え村まで行くそうです。それぞれの家にはボートがあり、子どもたちもそのボートに乗って学校へ行きます。高床式の家々は、他の地域の家よりもやや高く、雨季に牛を飼う小屋、収穫物を貯蔵しておく小屋などもすべて高床式になっています。

船に車を乗せて川を渡る

この地域の織り機は、1日に4～6mも織り進むことができるそうです。タケオの絣が50～70cmくらいなのを考えるとかなりのスピードです。この織り機を使って、細い糸でスカーフを織っている生産者が隣の村にいると聞き、その村に行くことになりました。そこに行くには家の裏から崖を降りて、小さな舟に乗って小川を渡らなければなりません。川の深さを尋ねると3mくらいとのこと。不安を感じながらぐらぐらと揺れる小舟に乗って対岸（プレイベン州）の村へ行きました。そこでは「こんな薄いものが本当に手織りでできるのか?」とずっと思っていましたが、この織り機で「カッタカッタ」とリズムよく織られている様子を見ることができました。縦糸が1cmに20本から25本ということで、横幅1mの生地では、2,000～2,500本もの縦糸を張ることになります。気の遠くなるような細かい作業です。この地域では、伝統的に細い糸で織る技術があり、かつては蚊帳などを織っていたそうです。

織り機のリズムが村に響きます

以前は、ほとんどの家で、機を織っていて、その音でうるさいほどだったのですが、リーマンショック以来、織物の売れ行きが悪くなり、多くの人がプノンペンに出て行ったため、今では織っている人は少なくなってしまったそうです。カンボジアでは、若い人たちが伝統的な織物ではなく、工場で働くことを選ぶ傾向があるため、織物に携わっている人々が徐々に減少しています。ここの織物は、ほとんどが海外へ向けて輸出する品だそうです。いつまで世界市場での競争に対応していくことができるのかと大変気になりました。

生産地を案内してくれたのはLoom's（ブランド名）のチャムナップさん。プノンペンのショールームを兼ねた自宅にお邪魔して、春から販売するスカーフなどの仕入れの他、5月の福祉クラブの共同購入の製品の色決め、注文をしてきました。タケオの絣とはまた違った、薄くて軽く、肌触りが抜群のこの「春を呼ぶ」スカーフをどうぞ楽しみにお待ちください。

（クラフトチーム　筒井由紀子）

from Japan

「ほしい未来は自分で創る」～大学生に向けて～

桜美林大学での講義

2015年12月21日、桜美林大学での「教えて! かにゃお先生」講座※に事務局の下田が登壇しました。地球の木と言うと海外支援、日本国内での開発教育に携わっていることは読者の皆様もよくご存じのことと思いますが、時々、こうして大学に呼ばれて、講義の中で地球の木の理念と活動を紹介しています。今回、桜美林大学での講義で私が強調したのは、地球の木をはじめとするNGO活動は、一種の社会運動であるということです。地球の木の場合はその出自が生協運動、すなわち、商品を介した生産者と購買者ではなく、生かし生かされる関係としての生産者・消費者の連帯があります。海の向こう側に貧しくかわいそうな人たちがいるから援助するのではなく、そうした状況を生み出している構造的な問題に目を向け、私たちもその一端に関わっていることを認め、共に解決していこうとしている点が、援助活動と社会運動の大きな違いであると思います。

もう一つ、学生にとっての大きな関心事は、職業としてのNGOです。NGOはたくさんのお金が得られる職ではありませんが、お金がたくさんあることと幸せであることはまた別の話です。限られた資源の中でどのような暮らしを立てていくのか。そういった所に関心を向けてみると、ライフスタイルの試行錯誤そのものはとても刺激的ですし、海外の人たちの工夫に満ちた暮らし方には目を見張るものがあります。NGOは、望ましい未来を自分の手で創ることに面白さを感じられる人にとっては、とても多くのチャンスとヒントが眠っていることを学生に伝えてきました。

（事務局　下田寛典）

※「教えて! かにゃお先生」講座
かにゃお先生は、神奈川県内のNPOの活動や社会貢献活動などの「いいこと」を紹介する神奈川県のマスコットキャラクター。「教えて! かにゃお先生」講座は、年に数回、社会貢献活動への意識喚起のために、NPO/NGOの実践者を招いて大学等で活動を紹介する神奈川県のNPO協働推進活動の一つ。

気仙沼支援報告
気仙沼だより その12

5年目を迎える被災地

よみがえる記憶

東日本大震災から今年で5年を迎えようとしています。気仙沼では、嵩上げ工事が行われ、少しずつではありますが復興住宅の工事も日に日に進んでおります。寂しいですが、どんどん以前の気仙沼から新しく変わっていっています。

5年と言われても私には、そんなに年月がたっている気はなく、つい何日か前のことのように感じています。今でもふとした時に記憶が戻ります。あの、泥だらけになりながら父親を探し、まだ水も引かない、加工場の下水や重油やヘドロが混じった何とも表現し難い異臭の瓦礫のことや、火事で燻っている中を歩いたことや、何人もの亡くなった方々を見つけたこと。その中で雰囲気が父に似ている人を見つけた時は、全身が震え、私1人では確認が出来ず、消防士の方達を連れて来て確認をしてもらったこと。

ボランティア活動を始め昼間は、瓦礫撤去、暗くなってから打ち合わせ、帰りが遅くなってしまった時は、車の中で眠り、太陽が出てからボランティアの朝の集合時間まで、父親を探し、そこからボランティア活動、という様な生活を送っていたこと。この生活リズムは、忙しく動き回り、現実を忘れられたので私には良かったのだと思います。その中でも大変だったのは、いろいろな事情を持っている被災者でもありボランティアスタッフでもあるメンバー全員をまとめる事でした。

運動の喜びを子どもたちに

そして今は、スポーツトレーナーとして、震災前からの夢である、地元で運動教室を開催してみんなに元気になってもらい、地元からオリンピック選手がどんどん出られるようなお手伝いをしていきたいと思っています。震災を経て、運動教室がより一層必要になり、ボランティアという形で行うことができて、地球の木の方々には、大変感謝しています。

5年前に比べて、子どもたちの体力が著しく落ちてしまっていることが分かり、運動教室の定期的な開催を要望されました。原因は、校庭・公園・空地に仮設住宅が建設され、遊び場を失い、ダンプ・重機の往来で危なくなり、外に出なくなった事が考えられるとのことでした。また驚いたのは、インターハイでよく優勝していた部活が今では、入部が無く廃部になってしまったことでした。

小さい頃から運動をしないで来た子どもたちは、運動をする喜びを知らず、年々体力が低下しています。成長していく時に大変大事な忍耐力が無く、人との関わりが上手くできない子どもが増えてしまっています。なので、子どもたちの運動教室を定期的にいろいろな地域で開催していく重大さを身をもって知りました。今後運動教室を開催していきますので今まで以上のご支援ご協力をお願いします。

（TreeSeed元代表　高木裕治）

運動教室

地球の木で活動する／私の場合

私は地球の木の設立直後から参加している会員ですが、入った動機は「何となく面白そう」という、いいかげんなもの。しかも常勤で忙しいのを言い訳に、会費を払う以外は会報も斜め読みという「幽霊」会員を続けてきました。昨年の退職を機に、今やっともう少し真面目に地球の木と関わっていこうかと考えているところです。

何年か前、地球の木が活動家で韓国人のキムさん（女性）を日本に招いたことがありました。ホームステイ先を募集していたので、「お泊めするだけなら」と軽い気持ちで引き受けました。会話は何とか英語で行い、依頼どおり送迎もし、無事終わった時には正直ほっとしました。それだけの関係のはずだったのですが、その後たまたま家族で韓国に行くことになり、お会いできるのか半信半疑で連絡をしてみたところ、大歓迎をして下さったのです。それ以来我が家の娘たちもふくめ、家族ぐるみで何回かソウルでお会いしています。2014年の夏にはキムさんご夫妻だけでなく、息子さんたちも来てくれました。楽しいひとときでした。日韓の間にいろいろ問題が生じていた頃だっただけに、若い世代の交流の姿は、ちょっと明るい気持ちにさせてくれるものでした。

地球の木が与えてくれたこんな素敵な出会いに、本当に感謝しています。人と人とが実際に会って話しをすることで生まれてくる思いがある、ということを実感することができました。アジアの国々で暮らす人たちと手を携えて、より幸せな社会を目指す地球の木の活動を、これから少しでもお手伝いできれば、と思っています。

（港北区　滝口みち）

被災地に思いを寄せて

仮設住宅に住んでいる方々と交流を続けている「地球の木」。現地の声を聞きながら、地球の木が設立に関わった「Tree　Seed」と共に支援を続けています。現地訪問だけではなく、様々な方法を工夫して連絡を取り、きめ細かな支援を続ける事を心がけてきました。心のカウンセリングを行うグループの紹介もしました。このグループは現在も仮設住宅を訪問し、住民の話を受け止める地道な活動を続けています。また、何とか仮設住宅の人たちに、手仕事で少しの収入と生きがいができないものか、との模索も行いました。

時が経つにつれ、被災地の状況も変化しています。明日の生活がどうなるか分からず必死だった時を経て、今は将来に向けて様々な課題が見えてきました。1つは仮設住宅がなくなることで、自分で家を再建するのか、災害復興住宅（公営住宅）に入るのか。条件によって家賃が変わることやどこの地区を選択するか。また元住んでいた土地を買い上げてもらえた人とそうでない人。元の地域に帰れる人と住宅が建てられない地区になり、戻れない人。これらのことは将来の暮らし方にも大きく影響するでしょう。一人ひとり状況が違い、家庭の内情まで説明しないと補償が受けられないことでも悩んでいる人が多いようです。

また、土地そのものも防波堤の高さが市の提案で何回か変わり、嵩上げ工事を遅らせる一因となりました。そして土地も住宅地、工場地とはっきりと線引きされ、個人商店で生活再建を考えていた人たちに大きな障害になってしまいました。災害に強いまちづくりの考えが住民に共有されないまま進められたように感じました。

区画整理が進む復興住宅地

これからも私たちは被災者の方々にそっと寄り添っていきたいと思います。支援の仕方は変わっていきますが、変わってはいけないこともあります。そこに暮らす人々にとって本当に良いことなのかどうか見極め、時間をかけるべきこともあるし、すぐに進めて行かなければならないこともあります。彼らを理解し、決して忘れないことを心掛け、必要であれば支援を続けられるよう「Tree　Seed」と相談しながら進めていきます。皆さまにも思いを寄せていただき本当にありがとうございます。これからも情報を発信していきます。　（副理事長　堀 千鶴）

原発は本当に安全なのか　消費者の選択が問われるとき ―電力自由化―

1月9日（土）、『日本と原発』の上映会（於：保土谷公会堂、主催：WE21ジャパンほどがや、WE21ジャパン旭、協力：地球の木）に参加しました。映画は、事故直後に浪江町で生存者捜索を続ける中、突如避難指示を受け捜索を断念せざるを得なかった苦悩を抱える地元住民の声から始まります。そこから有識者へのインタビューを通じて、原発は本当に安全なのか、本当にコストが安いのかといった根源的な問いを追求していきます。東日本大震災から間もなく5年が経過しようとしていますが、忘れかけていたこと、そして今まで知らなかった原発の真実を突き付けられる3時間でした。

2016年4月1日には電力の小売全面自由化がスタートします。TVコマーシャルでは「セット割」などコスト面でのPR合戦の様相を呈していますが、今だからこそ節度ある電気の利用、電気の地産地消、再生可能エネルギーの選択など、消費者一人ひとりの選択が問われています。（事務局　下田寛典）

活動日誌（12月～2月 抜粋）

12月
- 2～8日　ネパール調査
- 3・4日　気仙沼訪問
- 12日　JVC国際協力コンサート・クラフト販売出店（昭和女子大学）
- 14・15日　デポー展示会（ちがさき）
- 21日　「教えて! かにゃお先生」講座（桜美林大学）

1月
- 18日　第6回理事会
- 22～27日　カンボジア訪問
- 30日　地球の木講座2016（かながわ労働プラザ

2月
- 5日　JVCラオス駐在員帰国報告会（なか区民活動センター）
- 6・7日　よこはま国際フォーラム2016 ネパール報告で参加（JICA横浜）
- 3～16日　AMOUR! フェアトレードチョコと世界の愛しい雑貨フェア出店（恵比寿三越）
- 12～15日　南北コリアと日本のともだち展（アーツ千代田3331）
- 16～3月6日　第3回外国人学校の子どもたちの絵画展（横浜市中央図書館）
- 22日　第7回理事会
- 27日　デポー展示会（東戸塚）
- 27日　ちがさきサポセンワイワイまつり（茅ヶ崎中央公園）

第17回地球の木総会のお知らせ

日時：5月29日（日）13:00〜16:30　　場所：横浜市開港記念会館9号室

※詳細は同封の「第17回地球の木総会のお知らせ」をご覧ください。

INFORMATION

★地球の木のプログラムは、みなさまの会費と寄付で支えられています

幸せ分かちあい年末募金ご協力いただきありがとうございました

今年も会員の皆さまをはじめ、100名を超える方からご協力をいただきました。皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

【年末募金総額：987,960円】

〈寄付先別内訳〉

・ネパール	
幸せ分かちあいムーブメント	274,360円
・ラオス	
森林と農業プログラム	140,000円
・カンボジア	
DV/レイプ被害者支援	65,000円
・東日本大震災気仙沼支援	66,500円
・地球市民活動（講座開催、多文化共生など）	10,000円
・無指定	432,100円

※2015年にいただいた寄付の領収証は2016年1月28日までに発送いたしました。ご不明な点がございましたら、地球の木事務局までご連絡ください。

地球の木カレンダー2016ご協力いただきありがとうございました

今年は壁掛け710冊、卓上59部をご購入いただきました。カレンダーの収益は、ネパール・ラオス・カンボジアの支援に使われます。皆さまのご協力に心より御礼申し上げます。

イベント情報

あーすフェスタかながわ2016

★今年も地球の木はチヂミで参加します★

日時：5月14日（土）、15日（日）
10:00〜16:00
場所：神奈川県立地球市民かながわプラザ
（あーすプラザ）
横浜市栄区民文化センター（リリス）
JR根岸線「本郷台駅」徒歩3分

多文化共生社会の実現に向けて互いを理解する機会をつくるため毎年開催されています。今年で17回目を迎えます。地球の木は実行委員として第1回から参加しています。世界の民芸品、フェアトレード・グッズなどの販売、各国の料理を提供する世界屋台村が催されます。

教材体験フェスタ2016

日時：2016年3月26日（土）、27日（日）
10:00〜18:00
場所：JICA横浜

地球の木オリジナル教材「マジカルバナナv3」を展示・販売します。「マジカルバナナv3」のワークショップは27日。申込みは開発教育協会（DEAR）まで。

今年、地球の木は25周年を迎えます。現在、記念イベントを企画しています。

特定非営利活動法人
地球の木
EARTH TREE

編集後記

東日本大震災から5年。今号で12回目となる「気仙沼だより」を改めて読み返してみました。Tree Seedのメンバーから届けられた便りはいつも支援に対する感謝と、前に進もうという決意が述べられていました。しかしメンバーの多くが震災当事者であるという事を、今さらながら思い起こして、自分のうかつさに愕然としました。（M.H.）